

地域住民参加型の新しい子育て組織の研究 ファミリー・サポート・センターで何がおきているか

木野綾子

= 論文要旨 =

ファミリー・サポート・センター（以下ファミサポ）は、新エンゼルプランでも目標値が掲げられている、仕事と家庭の両立事業の目玉といえる。そのファミサポは、平成16年度の目標値をすでに平成14年度に達成している。行政サービスのすき間を埋めるようなサービス内容、更に、子育てを経験した地域住民をも巻き込むという地域住民参加型の地域に根ざした新しい子育て支援として広がっている。このような、地域住民参加型の新しい子育て支援としてのファミサポの価値を、会員のインタビュー、更には会員登録場面のビデオ分析の視点から言及する。

0.まえがき

ファミリー・サポート・センター（「仕事と家庭両立支援特別援助事業」）とは

ファミリー・サポート・センター（以下ファミサポ）は、子育てと仕事を両立させるための支援事業として、労働省（当時）が1994年度から始めた。正式名称は「仕事と家庭両立支援特別援助事業」という。2001年度省庁再編で旧厚生省と合併したことで、働いていない家庭の子どもも預かりの対象となった。ファミサポを設置するのは市町村など自治体で、国は経費の2分の1の補助を行う。残り4分の1を都道府県、4分の1を市町村が負担する。自治体は公益法人等に委託することができ、社会福祉協議会や保育所の連携組織、NPO法人などにも委託している。

ファミサポは、育児支援を受けたい会員（依頼会員）と手助けをしたい人（提供会員）からなる会員組織で、センターのアドバイザーが依頼会員からの依頼に応じ、提供会員を紹介し、会員同士で地域において育児支援を行う。なお依頼会員は提供会員を兼ねる、「両方会員」にもなれる。

ファミサポは原則として人口5万人以上の市町村（特別区）を対象に設置され、政令指定都市及び、10万人を越える市区については支部を設置することもできる。ファミサポは仕事と家庭の両立事業の目玉ともいえ、新エンゼルプランでも目標値が掲げられている。（16年度の目標値が180カ所平成14年度で193カ所設置されている）

このように、すでに16年度の目標値を上回る数のファミサポが設置されている点は非常に興味深い。隆盛を誇っているファミサポがどのような存在として社会に位置付いているのか、探求する価値があるように思われる。

本稿は、木野が徳島大学大学院人間・自然環境研究科人間環境専攻に在籍中に修士論文として提出した原稿を基に発表会での討論等をふまえて書き直したものである。

ここで、ファミサポの位置づけについて、もう少し明確にしておく。表1は、子どもの年齢別・保育所終了及び放課後利用できるサービスを示している。利用できるサービスについては、いずれも、19時頃までと時間制限があり、その時間までには子どもを迎えにいかざるを得ない状況である。このような状況を反映して、ファミサポの支援の内容は、下記のようにになっている。

ファミサポの支援の内容（子育て支援の場合）

- ・ 保育所、幼稚園、学童保育所、小学校への送迎
 - ・ 保育施設などの時間外、休園日などの一時保育
 - ・ 保護者が学校行事などに参加する場合の一時保育
 - ・ 保護者が病気、出産、看護などに該当する場合の一時保育
 - ・ 保護者が心身共に育児に疲れたなどの場合の一時保育
- などとなっている。

依頼会員になる理由でもっとも多いのは、急な残業や子どもの病気が長引いた場合に備えてなどである。

表1 子どもの年齢別・保育所終了後及び放課後利用できるサービス

年齢	～3歳	4歳～6歳	7歳～9歳 小学校低学年	10歳～12歳 小学校高学年
保育所 学校	保育所	保育所 or 幼稚園	小学校	小学校（注2）
利用できる サービス	延長保育 19時頃ま で	延長保育 19時頃まで	学童保育（注1） 18時半まで	学童保育 児童館

注1 放課後児童健全育成事業

注2 補助金の対象は9歳（小学校3年生）までであるが、学童保育によっては、高学年の利用も認めている。

表2は子育てに関する行政サービスを示している。制度的には整っているようにも見えるが、定数が定められている為、定員数を超えた場合は利用できないという現実がある。

表2 子育てに関する行政サービス

保育所	特 別 保 育				乳幼児健康支援一時預かり事業
	低年齢児保育	延長保育	一時保育	休日保育	
保護者が就労等のため、療育する就学前の乳幼児を家庭で保育することが困難な場合	乳児をはじめとした低年齢児の預かり	午後6時を超えての預かり	一時的な預かり	日曜・祝日の家庭での保育が困難な場合	病気回復期であり、自宅で療養しなければならないときに、家庭での療育が困難な場合

このような、現状の中で、延長保育終了後、学童保育終了後、また、子どもが病気になった場合などに行政サービスとのすきまを埋めるような役割を担っているのが、ファミリー・サポート・センターである。

民間の託児所、ベビーシッターなどもあるが、料金的にはファミサポの方が安くなっている。また、何か子育てに関して手助けをしたいと考えている人にとっても、市町村が運営にも関与している、保険に加入しているなどの点から参加しやすい制度となっている。

1.研究目的

ファミリー・サポート・センターは、地域における新しい子育て支援のあり方として浸透しつつある。活動数も増え、ファミサポの設置数も16年度の目標値をすでに超える数が設置されている。各ファミサポは、ホームページを作成したり、広報誌、機関誌を発行したりと地域住民へのアピールに積極的に取り組んでもいる。そのファミサポにおいて、パンフレット、マニュアルに書かれていない水準で、インタビュー調査ではわからない水準で、ファミサポに存在している秩序を明らかにすることが本研究の目的である。

2.研究対象

1) Tファミリーサポートセンター

財団法人県勤労者福祉ネットワークがT市の委託を受けて、1999年10月に開設。(T市の人口は26万人程度。ファミサポの設置には人口5万人以上の市町村(特別区)で300人程度の会員数が見込めることなどが設置の基準となっている)元保育所長ら2名がアドバイザーとして所属している。運営費は年間約1千万円である。

2003年3月31日現在の会員数は525人(依頼会員335人、提供会員128人、両方会員62人)で、開設から1年間は月平均140件程の活動だったが、現在活動数月平均350件まで伸びている。

平成14年度では4483件の活動があり、援助内容では、保育所幼稚園の迎え及び帰宅後の預かりが一番多く、続いて保育所幼稚園の登園前の預かり及び送り、保育所幼稚園の迎えとなっている。援助を受ける子どもの年齢は5歳児、4歳児、2歳児の順となっている。

T ファミリーサポートセンターは、県民 82 万人の県内において最初に設置された。以後 2002 年 7 月に 3 町合併により県内 2 番目の I ファミリーサポートセンターも開設し、県としては、5 か所の開設を予定している。T 県少子化対策計画の重点施策の一つ。仕事と子育ての両立を支援する地域組織づくりの具体的な内容として「地域での仕事と子育ての両立を促進するため、相互援助組織であるファミリー・サポート・センターを需要に応じて 5 か所設置。」と記してある。

T 県少子化対策計画 (<http://t-kosodate.net/doc/plan01.php> 2003.6.20 検索)

2) T ファミリー・サポート・センターを調査の対象とした理由

開設後 3 年が経過し、会員数、活動数を順調に増やし、新しい子育て支援として浸透しつつある。同じ県内に I ファミサポが開設されたが、(開設は平成 14 年 7 月)日が浅く、地域においても知名度はまだ低い。

3) 調査の概要

- (1) ファミサポの登録場面 2002 年 9 月 17 日、2003 年 3 月 5 日(ビデオ撮影)
- (2) ファミサポ第 6 回交流会 2002 年 7 月 6 日(ビデオ撮影)
- (3) インタビュー

3. 研究方法

1) 調査方法

T ファミサポに研究目的を書面にて伝え、まず、ファミサポについて知るために、ファミサポ第 6 回交流会(2002 年 7 月 6 日)に参加し、参与観察を行った。それと並行して、アドバイザーよりインタビューに応じていただける会員を紹介していただき、それぞれにインタビューを行った。また、アドバイザーへのインタビュー、登録場面のビデオ撮影を行った。

2) 調査期間：2002 年 7 月 6 日～2003 年 3 月 5 日

3) 分析の視点

本稿の目的は、ファミサポにおいて、パンフレット、マニュアルに書かれていない水準で、インタビュー調査ではわからない水準で、ファミサポに存在している秩序を相互行為分析により明らかにすることである。その為に、会員登録場面をビデオ分析する。アドバイザーと会員の相互行為により、いかにしてファミサポはファミサポとして価値づけられているのかを分析する。本稿で分析したものは依頼会員の登録場面のみではあるが、そこからファミサポとしての秩序が発見できると考える。

4.インタビューより

インタビューは、極力インタビューイの自由な語りを尊重しながら、半構造化面接を行った。質問事項は以下の内容である。両方会員については、活動の多い方を中心にインタビューを行った。アドバイザーにもインタビューを行った。

表3 インタビュー項目（提供会員用）

現在（あるいは過去に）提供会員としてどのような活動をされていますか。（活動の内容、活動の頻度等）
提供会員となられたきっかけ（動機）と活動期間
今までの職業経験が、今の活動に役立っているか？
実際に提供会員として活動を始められて、良かった事、苦労している事
ご家族の反応
提供会員として活動の継続についての考え
子育てについて思う事
ファミサポを含めて、子育て支援について思うこと

表4 インタビュー項目（依頼会員用）

ファミサポの活動を何でしりましたか
利用しようと思ったきっかけ
利用登録時に提供会員に望んだ点
利用することに何か抵抗はなかったか
どのような援助をうけていますか（援助内容、頻度）利用期間
利用して良かった事、改善して欲しいと思うこと
お子さまの反応は
ご家族の反応は
子育てについて思うこと
ファミサポを含めて、子育て支援について思うこと
子育てについて思う事
ファミサポを含めて、子育て支援について思うこと

1) インタビューを取り扱う意義

ここでは、ファミサポに関して、それぞれの立場（依頼会員、両方会員、提供会員、アドバイザー）でどのように語られているかについて述べる。これは、同時に、それぞれの立場としてどのようにファミサポの一員となっているのかを示すことにもなる。すなわち、それぞれの立場において語られた内容から、ファミサポらしさが現れている箇所をピックアップする。

さらに、ファミサポの大きな特徴である、「依頼会員」と「提供会員」のマッチング（依頼会員と提供会員を双方に紹介して会わせること）に関する状況を、インタビューの場面から見てみる。

桜井厚は次のように述べている。

「人間生活の語りの研究の究極的な目的は、経験の解釈である」(josslson et al.1995:ix)といわれるが、解釈にしる、経験にしる、きわめて相対的でコンテクスト依存的な概念である。社会的なるものの因果的法則を求める「一般理論」ではなく、個人が自らの経験にどのような意味をあたえるかの説明を構築し、そこからなんらかの解釈をとりだす作業は、ギアーツの言葉を借りれば、「われわれ自身のものではない理解をわれわれが理解するとはどういうことであるかを何とか理解しよう」とするやっかいな試みなのである。(桜井 2002:172)

桜井は、インタビューは、経験の解釈を目的としているが、(因果法則を求める「一般理論」ではないとしている)非常にやっかいな試みであるとしている。すなわち、インタビューにおいては、それぞれの対象者が経験(意識していること)していることを解釈していくことになる。その点においては、因果関係などはわかりにくい。私は、ここではそれぞれ(依頼会員、両方会員、提供会員、アドバイザー)の経験より語らえた内容から、ファミサポを見ていく。これは、ビデオ分析とは質的にことなるが、ファミサポに関する一つの捉え方としてここに記しておく。

2) インタビューを分析する視点

依頼会員、両方会員、提供会員、アドバイザー各2名づつに、自由な語りを尊重しながら半構造化面接を行った。それぞれについて、インタビューは30分~45分程度である。承諾を得てインタビューの全体をテープ録音させてもらった。

ここから、それぞれの立場(依頼会員、両方会員、提供会員、アドバイザー)がファミサポの組織の一員として、依頼会員、両方会員、提供会員、アドバイザーとして位置づけられ、また、ファミサポの組織の一員として表現されている部分を明らかにする。すなわち、インタビューからわかることの一部について言及する。

また、ファミサポの大きな特徴であるマッチングに関する内容の表現に注目する。

3) インタビューからわかること

依頼会員については、子どもの援助をどこに依頼するかの悩みから「あとくされがない」という視点でファミサポを選択しているという一つの現状がわかった。また、ファミサポに依頼する事に関しては女親(援助を受ける子ども)の方が積極的であり、男親は、積極的ではないが肯定的ではある状況が垣間見られた。

両方会員については、インタビューを行った2名共に転勤族であり、子育てに関して身内のサポートが得られない状況での、一つの対策としてファミサポを活用している様子がわかった。また、活動をめぐる、両方会員の子どもの心理的变化ということがわかった。

依頼会員については、ファミサポにおける提供会員の「有償ボランティア」という位置づけ通りの考えを、提供会員自身の語りの中からも発見できた。

アドバイザーについては、依頼会員と提供会員との仲介者として、かけひきしている様子、そして、そのかけひきこそがファミサポの意義の表明、すなわちアドバイザーの役割であることがわかった。

マッチングに関しては、アドバイザーの配慮、苦悩の様子がわかり、その点に関しては、会員にも通じている様子がわかった。

表5 インタビュー対象者一覧表

(年齢は著者の推測)

	氏名	年齢	特 徴
両方会員	U氏 資料イ (注)	20代後半 女性	4歳女児の母親 転勤族で3年前に他県より転居してきた。両方会員として子どもの預かりを依頼した経験がある。現在は提供会員としての活動が多く、5歳男児の幼稚園への迎えの依頼を受けている
	M氏 資料ロ	20代後半 女性	小4男児、小1女児の母親 転勤族で3年前に他県より転居してきた。両方会員ではあるが依頼をしたことはない。提供会員として週二回程、小1女児、保育園年長の男児の姉弟の迎え、預かりを受けている。
依頼会員	S氏 資料ハ	30代前半 女性	幼稚園年長の男児、年中の女児、1歳女児の母親 次女の出産前には働いていたので、幼稚園への送迎を依頼していた。また、次女出産時に上の子ども二人の預かりを依頼した。
	I氏 資料ニ	40代前半 女性	小1女児、保育園年長の男児の母親。公務員。2人の方とペアを組み、迎えと預かりを依頼している。
提供会員	A氏 資料ホ	40代前半 女性	4歳男児の母親。 地域リーダーとしての活動にも積極的である。
	N氏 資料ヘ	40代後半 女性	高校生、中学生、小学生の3人の子どもの母親。 ボランティアとして、本の読み聞かせの活動も行っている。
アドバイザー	K氏 資料ト	60代前半 女性	アドバイザーとなって1年半くらい。 幼稚園教諭、保育士の資格を持つ。
	F氏 資料チ	60代前半 女性	T市内の保育所を退職する時に市の方からアドバイザーの話があり、すぐに引き受けた。準備の段階から現在まで、アドバイザーとして活躍している。県の方針としては、5カ所の設置を望んでおり、F氏が県南の保育所長会議の席でファミサポの説明を行うなどの活動もある。

〔注〕詳細は〔木野 2003〕資料編

5. ビデオ分析より

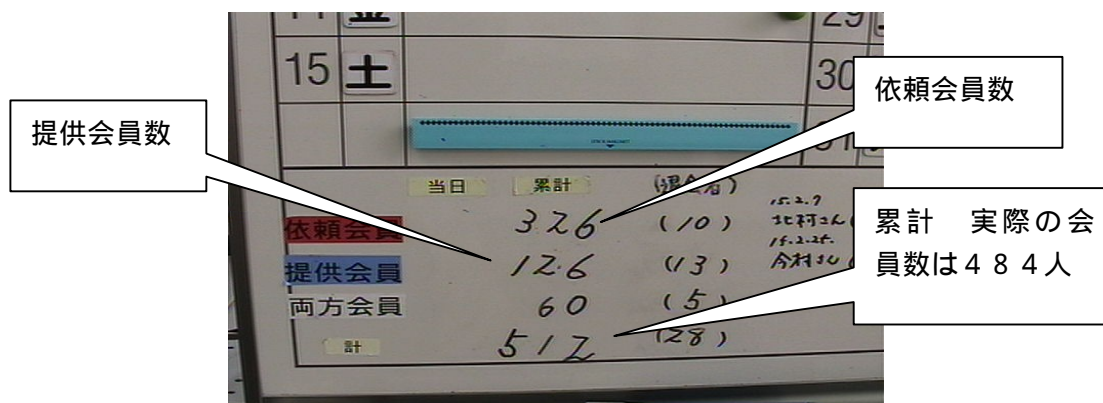
本稿の目的は、ファミサポにおいて、パンフレット、マニュアルに書かれていない水準で、インタビュー調査ではわからない水準で、ファミサポに存在している秩序を相互行為分析により明らかにすることである。つまり、パンフレットにも書かれていない、またインタビューでもわかり得なかった、会員の自宅の位置を地図上でアドバイザーと会員が相互行為により確認しあっている。そのような行為が、会員登録場面をビデオ分析することにより明らかになった。この行為に象徴されるように、アドバイザーと会員の相互行為に

より、ファミサポはファミサポとして価値づけられているのである。つまり、アドバイザーと会員の相互行為によって課題達成されているのである。また、アドバイザーと会員が相対していない場面においても、相互行為による課題達成場面がビデオ分析により明らかとなった。相互行為の達成はビデオ分析により明らかとなると考える。

1) 提供会員と依頼会員のバランスを保つように働きかけている組織

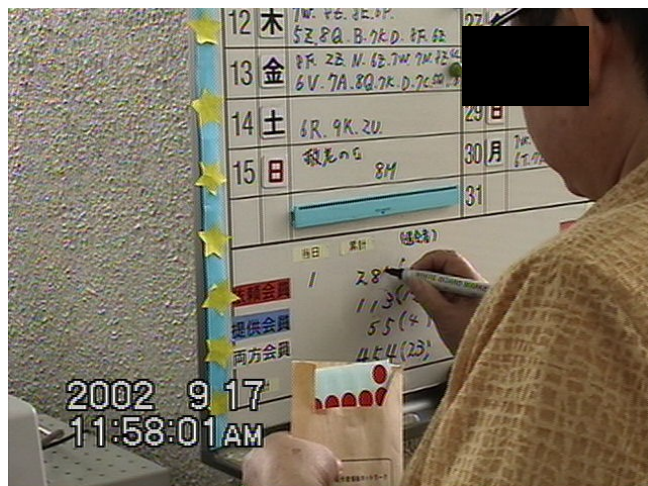
画像データ1は、現在登録している会員数を、依頼会員、提供会員、両方会員別に示している。ファミサポの設置基準として、「会員数300人程度が見込める」という内容が盛り込まれている。国が自治体への運営費の一部を補助する事業として、設置基準を満たしていくことは、非常に重要な事である。その点において、会員数の推移は、気になることではある。同時に、会員組織として成り立っているファミサポにとってマンパワーは重要である。

しかし、ここで注目すべきは、依頼会員、提供会員、両方会員別に表示されていることである。相互援助活動であるファミサポにとっては、相互援助が可能な、つまり、依頼会員と提供会員のバランスがとれた会員の構成が必要なのである。だからこそ、バランスが一目でわかるように表示されているのであり、バランスに気をつけて運営している組織であると言える。ここでは、依頼会員数、326人、提供会員数126人で依頼会員に対して、提供会員の少なさが一目でわかる。



【画像データ1：事務所の壁面にあるホワイトボードにかかれた現在の会員数(2003.3.5)】

同時に、このような会員数の変化を、アドバイザーは会員登録終了後すぐに、このホワイトボード上でも修正を行っている。(画像データ2)つまり、これは、依頼会員と提供会員の相互行為(相互援助)という主旨を表明していることであり、また、アドバイザーと会員の相互行為が、相対していない場面でも行なわれていることの表明ともなる。



【画像データ2：会員登録終了後、会員数の表示を修正しているアドバイザー
(2002.9.17)】

提供会員と依頼会員のアンバランスに関しては、ファミサポは画像データ3に示すように、提供会員の登録を呼びかけるチラシを作成している。



【画像データ3：提供会員を募集するチラシ】

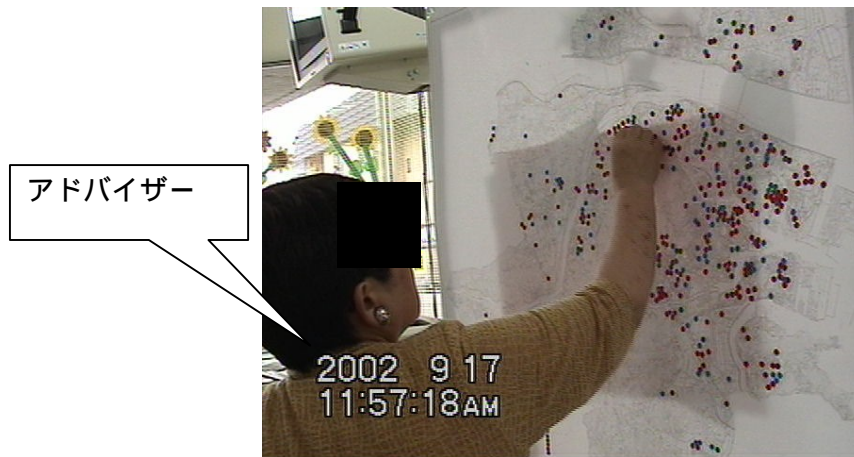
2) 地域に根ざした子育て支援

画像データ4及び画像データ5は地域別の会員数の分布を示している。

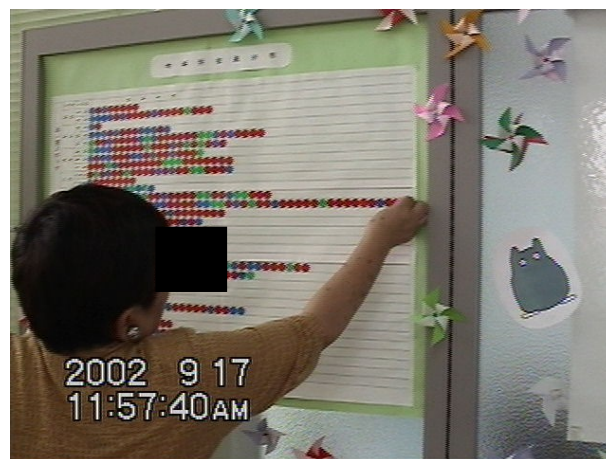
画像データ4では、T市内の地図を拡大し、その地図上にシールで会員数の分布を表示している。このように、会員登録が終了すると同時に、シールを貼るという作業をアドバイザーが行っている。

画像データ5は、中学校区別に分類した地域別に会員数、提供会員、依頼会員の割合がわかるように表示している。

この2つのデータからは、ファミサポが地域での子育て支援をサポートしている様子が見てとれる。地図上に会員の分布状態を表示する、地域別に会員数を表示するということだが、地域内で相互援助できるように働きかけている組織であることがよくわかる。



【画像データ4：会員登録後、アドバイザーが地図上にシールを貼り会員の分布が一目でわかるように表示している（2002.9.17）】



【画像データ5：会員登録後、アドバイザーが中学校区別にシールを貼り会員の分布が一目でわかるように表示している（2002.9.17）】

この2つのデータからは、ファミサポが地域での子育て支援をサポートしている様子が見てとれる。地図上に会員の分布状態を表示する、地域別に会員数を表示するということだが、地域内で相互援助できるように働きかけている組織であることがよくわかる。

3) アドバイザーの業務 その1 【会員登録の逐次的な達成】

ファミサポを訪れた人は、最初に入会申込書に記入することになる。この入会申込書を提出することが、ファミサポの会員になるという意思の表出となる。同時に、アドバイザーにとっては、入会申込書を受け取ることにより、会員登録を行うことになる。

ここでは、ファミサポ内に存在する秩序の一つとして、入会申込書の記入及び提出の場面をみていく。

取り上げるのは、(2003.3.5 午後 1:07:30 ~ 午後 2:04:07)の場面の一部である。この登録は、依頼会員 T 氏と依頼会員 N 氏の二人一緒に登録の場で、T 氏と N 氏は、親しい関係にある。今回は、前日に T 氏より会員登録をしたい旨の電話がセンターの方へ入っている。しかし、その電話の際には、N 氏も一緒にという話はなかった。アドバイザーは F 氏である。

アドバイザーは会員登録をスムーズに不備なく終了させる事が業務の一つである。その登録の最初の部分、つまり、入会申込書をアドバイザーが、会員に手渡し、会員が記入後アドバイザーが回収するまでの逐次的になされていく課題達成の様子を見ていく。

会員が訪れると同時に、アドバイザーは画像データ 6 に示すように、入会申込書及び手引き等登録に必要な書類をひとまとめにして、登録を行うテーブルの上に置いている。

そして、1:09:37には、二人の会員がテーブルにつくのをもって、アドバイザー F 氏が「申込書があるんです」と申込書を二人に手渡している。

申込書を手渡された二人の会員は記入を始める。そして記入がほぼ終わろうとしている時の場面に注目する。

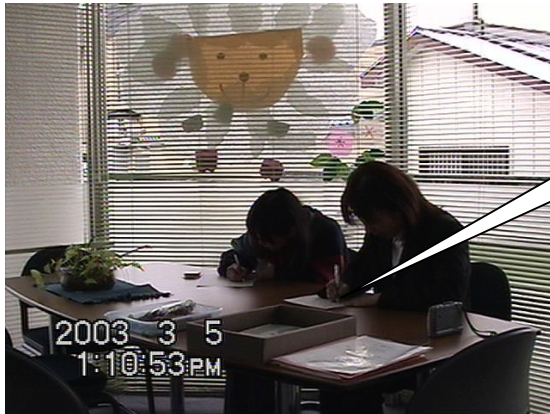


このケースの中に
入会申込書、手引き
筆記用具等が入っている

【画像データ 6 : 登録のテーブルに置かれた、登録時に必要な書類のひとまとめ

(2003.3.5)】

画像データ7は、「入会申込書」を二人の会員が記入している場面である。

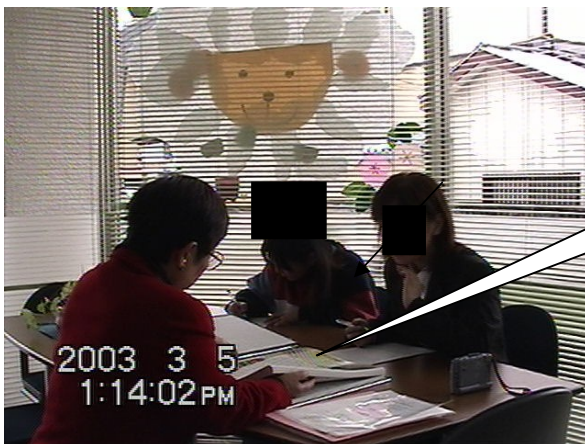


入会申込書（A4
サイズで両面）

【画像データ7：「入会申込書」に記入している場面

（2003.3.5）】

その後、アドバイザーF氏が地図帳を持ってきて席に着く。（1：13：42）そして、地図帳を開き始めると、今まで、「入会申込書」の記入を行っていたT氏の視線が地図帳の方へ移っている。（画像データ8）

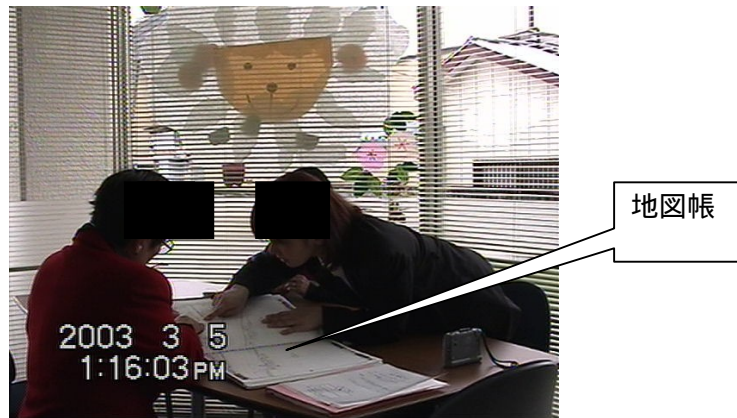


T氏の視線は
地図帳に移っ
ている

【画像データ8：アドバイザーが地図帳を開くと、T氏の視線が地図帳に移行

（2003.3.5）】

その後、T氏は身を乗り出して、地図帳をのぞき込み、T氏の自宅を地図帳から探し出す作業をアドバイザーF氏と協同で行っているのである。(画像データ9)



【画像データ9：身を乗り出して、地図帳を見るT氏
(2003.3.5)】

場面1 (依頼会員の登録場面 2003.3.5 資料又(詳しくは〔木野 2003〕を見よ))
この場面を会話から見ていく。Fはアドバイザーを表し、TとNは会員を表す。

1F: Y〔地名〕

2T: F〔地名〕なんです。手前の方なんですけど。Koさんがあって Kwさんがあって

3F: ええ

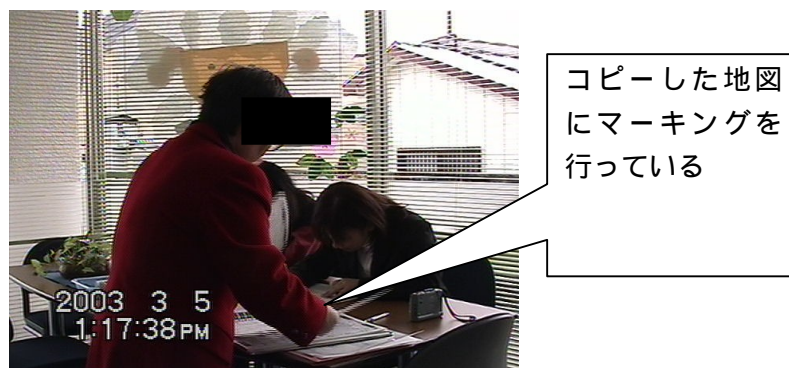
4T: ほんでTさんがあって、あっこれです。K 1-18

5F: はいはい

〔F氏が地図のコピーに行く〕

6F: ごめんなさい。これほなちょっと印、これで〔マーカ―〕ぬっとして下さい。

〔T氏はF氏の依頼に応じる(画像データ10)〕



【画像データ10：アドバイザーの依頼を受けて、地図にマーキングを行うT氏
(2003.3.5)】

次にN氏の自宅を地図上で確認する為に、F氏は再び地図帳をみる。すると、T氏は再度身を乗り出して地図帳を見る。

場面2 場面1の続き(依頼会員の登録場面 2003.3.5 資料又(詳しくは〔木野2003〕を見よ))

7T: S保育所でしょ。ほんでえーとHさんのところですから、MさんえーとHさんのここが40なので、ここの中です。ここの敷地内に建っているの

8F: あーそうですか

9T: はい、そこに

10F: はい

11N: この敷地内の一つになる。

12F: ああ、ほなけんほこらへん、ほの、Hっていうところだけいれとって〔マーキングの事〕下さったら

13N: はい

14F: うん、ほこの名前のところだけで

15N: はい

16F: はいはい、ありがとうございます。

この場面は、入会希望者のT氏とN氏が「入会申込書」の記入がほぼ終了しかけた時に、アドバイザーF氏が地図帳をひろげて、会員の自宅を探し始めたという場面である。アドバイザーの行動に連動するように、会員も一緒に地図上で自宅を探すという作業を行っている。そして最後には、コピーした地図をアドバイザーから渡されて、マーキングを行うという作業までも行っている。つまりこれは、アドバイザーと会員の相互行為により、会員登録という部分に内在している、地図上の自宅にマーキングを行うという作業までも、協同的に達成しているのである。

もう少し詳しくみていく。会員は「入会申込書」を渡されてすぐに記入を始めている。その時には、アドバイザーは席についていない。これは、「入会申込書」の記入に関しては特に説明を要しない。つまり、説明がなくても記入できるような内容になっていることの裏返しであるように思える。今回の場面でも、アドバイザーが席についた時点で、会員が「担任の氏名」という項目欄が埋められずに困って、アドバイザーに質問をしているが、その質問に関して、アドバイザーは「もうかんまんよ、ほんなんは」と返している。

アドバイザーは、「入会申込書」の記入がそろそろ終わるであろう時間を考えて、地図帳を準備して、席についたとも考えられる行動である。そしてアドバイザーが地図帳をひろげると、下を向いて記入していたT氏の視線が地図上に移動する。(画像データ8)アドバイザーは当然そのようなT氏の動きを把握していると考えられる。だからこそ会話の方でまずF氏は「Y〔地名〕」というように、T氏の住所を確認している。それを受けてT氏は、「〔Yではなく〕F〔地名〕」だと言い、身を乗り出して地図上から自宅を探すという作業に移っている。(画像データ9)ここまでの場面は、一見する

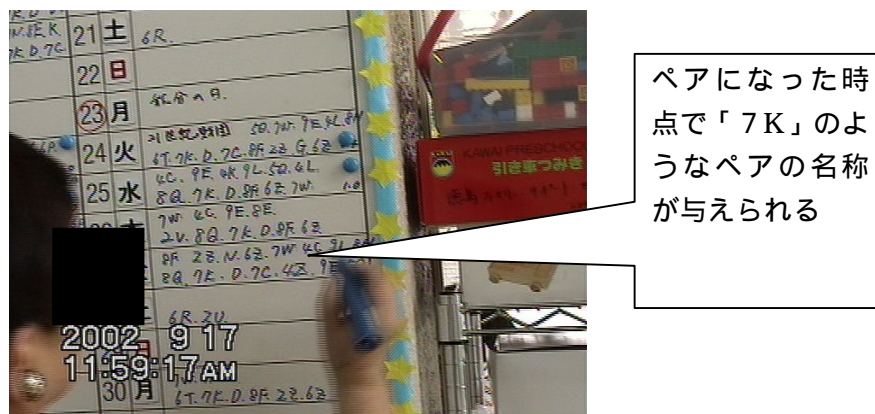
と、会員が自分が知っている自宅を探すという行為を自主的に行っているようにも見て取れるが、アドバイザーの地図帳を持って来て席に着くタイミング、会員の視線が動いた事を確認したあとでの発話等、アドバイザーの意図的な行動（会員の知っている事を利用する）のようにも見て取れる。

いずれにしても、アドバイザーと会員の相互行為によって、会員の自宅を地図上から探すという課題（会員登録という部分に内在する課題）が達成された。これが、アドバイザーの意図的な行動であるとするならば、それは、入会手続きをスムーズに行うというアドバイザーの責務を果たしているという事実の発見にほかならない。

地図上で確認（会員の自宅）出来た後は、その部分をコピーし、コピーした地図上にマーキングを（アドバイザーが依頼し、会員がマーキングを行う）している。このことから、「入会申込書」と同じ程度に、会員の自宅の位置の確認（「入会申込書」には住所を記入するが、住所としてだけでなく）が重要であることも見て取れた。地域での子育て支援を強調しているファミサポにとっては、当然のこととも思える。

4) アドバイザーの業務 その2【マッチングに向けての準備】

ファミサポの大きな特徴は、アドバイザーが依頼会員と提供会員のマッチングを行い、マッチングによってペアになったカップル単位で活動を行うことにある。画像データ11はファミサポ事務所内のホワイトボードに書かれた各ペアの活動状況を示している。



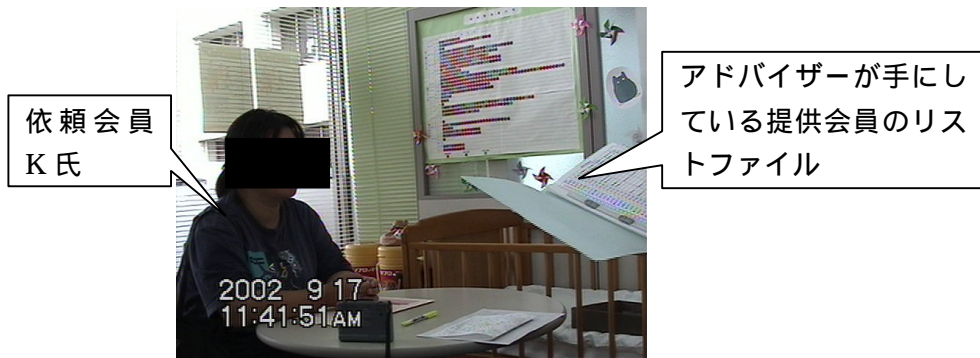
【画像データ11：ホワイトボードに書かれている活動状況及びアドバイザーは報告の度に追加・削除を行う（2002.9.17）】

この画像データ11は、このような形（ペアになる）になることが、ファミサポの主旨である「相互援助」を達成していることの証明となる。つまり、登録した会員同士をマッチングすることがアドバイザーの大きな業務になる。

会員登録の場面では、登録だけということではなく、アドバイザーが意図してマッチングの準備（活動の待機）をしている様子が見て取れた。

取り上げるのは、（2002.9.17午前10:00～午前11:55）の場面の一部である。この登録場面には、依頼会員K氏とアドバイザーF氏がかかわっている。

会員証を作成するのを待っている依頼会員K氏の前に、アドバイザーF氏は提供会員用のリストファイルをもって席に着く。（画像データ12）



【画像データ12：アドバイザーが、提供会員のリストファイルをもってくる
(2002.9.17)】

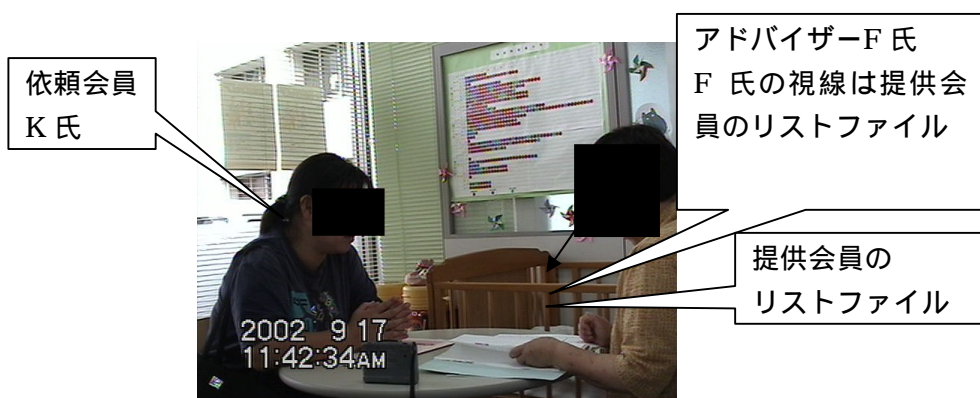
その後のアドバイザーと会員の相互行為を会話と視線を注目しながら見ていく。

アドバイザーは、提供会員のリストファイルに目を通した(画像データ13)あとで依頼会員の方へ視線をもどしつつ、ファイルの方へも視線を移しつつ、次のような会話に進んでいく。

場面3 (依頼会員の登録場面 2002.9.17 資料リ (詳しくは〔木野 2003〕を見よ))

Fはアドバイザーを示し、Kは依頼会員を示す。

- 1F：まあ、家がS駅の近くの方でね、(3)お寺の奥さんなんやけど見てくれる(2)お願いしてみようかと思う。(視線はファイル)
- 1K：S駅だったら近い。
- 3F：近いね(視線はK氏)
- 4K：はい
- 5F：ご自宅からだったらね(K氏の自宅地図を手に取り確認 画像データ14)
- 6K：そうやね。ほんで、ちょうど、ほこ通って帰ってきようけん、Sのあたりを



【画像データ13：アドバイザーが、提供会員のリストファイルを見る
(2002.9.17)】



アドバイザーがK氏の自宅の地図を出し確認

【画像データ14：アドバイザーが、提供会員の自宅の地図を取り出し確認
(2002.9.17)】

この場面は、K氏に合う提供会員を見つける準備、つまりアドバイザーがマッチングの準備をしている場面としてとらえることができる。

アドバイザーは、提供会員のリストファイルを持ち出し、K氏の状況に合いそうな提供会員を探している(画像データ12)そして、目星をつけてから、提供会員の情報を依頼会員のK氏に話し始めている。「まあ、家がS駅の近くの方でね、(3)お寺の奥さんなんやけど見てくれる(2)」とゆっくりとした口調で話し始める。そしてK氏の「近い」という発言を受けて、再度K氏の自宅と、紹介しようと考えている、S駅近くの提供会員の位置関係を確認している様子である。

この場面は、あくまでもマッチングの準備段階であり、お互い(アドバイザーと、依頼会員)の心づもりの確認といった場面である。その事は、「まあ、家がS駅の近くの方でね、(3)お寺の奥さんなんやけど見てくれる(2)お願いしてみようかと思う。」というゆっくりとした口調、間の取り方、そして視線がファイルを見ながらであることから読みとることができる。このアドバイザーのゆっくりとした口調、間の取り方から、K氏に「提供会員に対する希望があるなら、今言って欲しい」というメッセージを発していることと捉えることもできる。そして、K氏が「近い」という肯定的な反応を示したあとで、もう一度地図の確認(K氏の自宅と、紹介しようと考えている、S駅近くの提供会員の位置関係)を行っている。ここは、あくまでも確認をしているだけで、では「S駅の近くの提供会員と」と言う話にはなっていない。会話の続きを見ていく。

場面4 場面3の続き(依頼会員の登録場面 2002.9.17 資料リ(詳しくは〔木野 2003〕を見よ))

7F: ああ、そうですか

もう、中にはおいでるんやけど。こう迎えに、車で迎えに行くっていうんが、ちょっと車を利用するんをね。ちょっとご主人が反対される方もあったりして。

8K: ああ、そうですね

9F: もう車は、車やもう心配やけん、けっこうね

10K: やっぱしね、他の子どもさんですしね。

男の方は、ほらなかなかね。

もし何かあったらどなにするんってみたいな感じでしょうね。

11F：そうそう、そうなんです。ほういう方もあったりね。色々なんで、まあ、問い合わせせて見てね。

12K：はい

13F：まあ、自分はしたいんやけどって言うてね、結構あるんです。J中学校区でね。家で預かるのは大丈夫って言う方もありますのでね。ほれと夜にかかるでえね。7時から1時間位って言うたら。

14K：そうですね。そうなんですよ。

15F：ほなから、家族とか小さな子どもさんがある方やったら、ちょっとあのむつかしいかなとも思うしね。

16K：あっ、はいはい

17F：まっ、ほなけどどなにか、あの見て下さる方、まあ、一人か二人ね。

18K：はい、すみません。お願いします。

この場面は、アドバイザーが提供会員も色々条件を出している状況を説明している。それは、例えば「車を利用するのをご主人が反対される」というような一般的な話だったり、K氏の場合に適應するような話だったりもする。K氏に適應する話としては、「ほれと夜にかかるでえね。7時から1時間くらいって言うたら」「ほなから、家族とか小さな子どもさんがある方やったら、ちょっとあのむつかしいかなとも思うしね。」等である。そのように話しながらも、依頼会員の期待に応えてはいくという事を「まっ、ほなけどどなにか、あの見て下さる方、まあ、一人か二人ね。」と話し、依頼会員を不安にさせない、つまり、依頼会員が本日登録に来た課題は達成しているという内容の話の織り込んでいることも注目すべきである。

このように「場面4」に続いていくことから、「場面3」がマッチングの準備状態であると言うことができる。さらに、ここでは、「マッチングが簡単にできることではない」ということを表していると捉えることもできる。「場面3」で、アドバイザーは、住所からはK氏とS駅近くの提供会員が合うのではないかと考え、再度地図上で確認している。しかし、マッチングには、住所、距離的な要素だけでなく、「場面4」で語られているような、ご主人の反応、家族構成、預かる時間帯などが関係していることをK氏のニーズとも照らし合わせながら説明している。すなわち、マッチングには色々な情報を加味させて考えなくてはならないことを表示し、かつ、会員登録の場面は、マッチングの準備状態であることも表示している。

しかし、以上の内容だけで終わらせてしまったのでは、依頼会員は登録の為にファミサポの事務所を訪れた課題が十分に達成できていない状態のままである。そこで、最後にはきちんと「ほなけどどなにか」と依頼会員の期待に応えるように、提供会員を紹介することを約束している。活動の待機状態であることを示している。依頼会員はこのアドバイザーの言葉によってファミサポの事務所を訪れた今日の課題は達成していると考えることができる。

以上、みてきたように、アドバイザーは依頼会員のニーズを確認し、提供会員の情報を伝えつつ依頼会員の反応を確認し、会員登録時には、マッチングの準備を行っている。このことより、マッチングには、色々な情報を加味させねばならず、会員登録の場面（ファミサポ事務所をおとずれる）は、会員登録の終了、すなわち、活動の待

機状態をもって課題の達成となったことを表示している。

6.まとめ

1) 行政のすきまを埋めるファミリー・サポート・センター

ファミリー・サポート・センターは、正式名称の「仕事と家庭両立支援特別援助事業」が示すとおり、仕事と家庭の両立事業の目玉として注目を集めてきた。確かにファミサポは、延長保育終了後、学童保育終了後、また、子どもが病気になった場合などに利用される割合が高い。これは、子育てに関する行政サービスのすきまにあたり、ファミサポは、行政サービスのすきまを埋める活動によって広がってきている。

会員登録（ファミサポの事務所をおとずれる）の終了は、活動の待機状態であり、事務所内での課題は達成されたことになる。以後は、依頼会員と提供会員の相互の契約によって活動が展開され、登録という行政的な手続きを終えると、相互のニーズをみたしていくような活動が可能である。この点でも、ファミサポは行政のすきまを埋める活動ということができる。

2) 地域住民参加型の新しい子育て支援

会員へのインタビュー及びビデオ分析により、会員数の表示の仕方、マッチングのやり方などから地域に密着している様子が観察可能であった。より地域に密着した活動として定着させる役目としてアドバイザーが存在していることも観察可能であった。また、地域ごとに会員双方の自己決定を重視しており、このような面が、地域住民参加型の新しい子育て支援として広がっている要因の一つであると言える。

本研究のために、インタビューに応じていただきました6名のファミリー・サポート・センター会員の皆様、そして、会員登録場面のビデオ撮影に快く応じて下さいました3名の会員様には、深く感謝致します。皆様のご協力がなければ本論文は完成していませんでした。

また、度々の訪問にもいつも、にこやかに応じて下さり、情報を提供して下さいましたアドバイザーをはじめ勤労者福祉ネットワークの職員の皆様にも深く感謝致します。アドバイザーのお二人には、インタビューそしてビデオ撮影の段取りと細かいご配慮をいただき、私の計画を貫くことができました。深く感謝致します。

7.引用・参考文献

- 阿部 智恵子・樫田 美雄・岡田 光弘 2001 「資源としてのパースペクティブの可能性 障害者スポーツ（水泳）選手のインタビュー調査から」『年報筑波社会学』13:17-51。
- 赤川 学 2003 「男女共同参画社会と少子化」『比較家族研究』, 123-149。
- 赤川 学 2002 「ジェンダーフリーをめぐる一考察」『大航海』, 第43号: 64-73
新書館。
- coulter, jeff 1987 *The Social Construction of Mind Studies in Ethnomethodology and Linguistic Philosophy*=2000 西阪 仰(訳) 『心の社会的構成 ヴィトゲンシュタイン派エスノメソロジーの視点』, 新曜社。
- 福祉士養成講座編集委員会(編) 1999 『社会福祉士養成講座4 児童福祉論』, 中央法規。
- Gbrinm, J・F・j・A, ホルスタイン 1990 *What Is FAMILY?*=1997 中河 伸俊・湯川 純幸・鮎川 潤(訳)『家族とは何か』, 新曜社。
- 橋本 文子・樫田 美雄 1999 「ライフコースとセルフヘルプグループ あげぼの会(乳ガン患者のセルフヘルプグループ)T支部幹部へのインタビュー調査から」『徳島大学社会科学研究』, 12:1-41。
- 橋本 良明(編)2000 『コミュニケーション学への招待』, 大修館書房。
- 畠中 宗一 2001 『子ども家族支援の社会学』, 世界思想社。
- 久武 綾子他 2001 『家族データブック 年表と図表で読む戦後家族1945~96』, 有斐閣。
- 井上 輝子・江原 由美子(編) 1999 『女性のデータブック 第3版』, 有斐閣。
- 石川 実(編) 2001 『現代家族の社会学 脱制度化時代のファミリー・スタディーズ』, 有斐閣ブックス。
- 樫田 美雄・寺島 吉保 2003 「インフォームド・コンセントに家族はどのように関わっているか エスノメソロジー的検討」『社会学年誌』, 44: 33-55。
- 樫田 美雄 1995 「119番通話における緊急電話らしさの達成」『年報社会学論集』8:227-238。
- 樫田 美雄・喜多 加実代 1998 「緊急電話受付業務の社会学 通信司令室のインタージェント化を成功させるための相互行為分析」『電気通信普及財団研究調査報告書』, 12:324-333。
- 柏木 恵子 2001 『子どもという価値』, 中央公論新社。
- 川本 敏(編) 2001 『論争・少子化日本』, 中央公論新書。
- 基礎経済科学研究所(編) 1995 『日本型企业社会と女性』, 青木書店。
- 木野 綾子 2003 『ファミリー・サポート・センターの相互行為分析 地域での子育て支援の新しいあり方をめぐって』, 修士論文
- 北澤 毅・古賀正義(編) 1997 『社会を読み解く技法 質的調査法への招待』, 福村出版。
- 厚生省(編) 1997 『平成9年度版 厚生白書』, 財団法人厚生問題研究会。
- 厚生省(編) 1998 『平成10年度版 厚生白書』, ぎょうせい。
- 厚生省(編) 2000 『平成12年度版 厚生白書』, ぎょうせい。

- 厚生省児童家庭局企画課監修 1995 『子ども家庭福祉情報』, 恩賜財団母子愛育会 日本総合愛育研究所。
- 厚生労働省(編) 2001 『平成13年度版 厚生労働白書』, ぎょうせい。
- 厚生労働省(編) 2002 『平成14年度版 厚生労働白書』, ぎょうせい。
- 内閣府編 2002 『平成13年度 国民生活白書』, ぎょうせい。
- 日本婦人団体連合会 2001 『女性白書』, ほるぷ出版。
- 日本子どもを守る会編 2001 『2001年版 子ども白書 子どもと市民と創る21世紀』, 草土文化。
- 日本子どもを守る会編 2002 『2002年版 子ども白書 子どもと市民と創る21世紀』, 草土文化。
- 野々山 久也(編) 1996 『家族福祉の視点』, ミネルヴァ書房。
- 岡 真理 2000 『記憶/物語 思考のフロンティア』, 岩波書店。
- 奥村 隆 1998 『他者という技法』, 日本評論社。
- Emerson・R, R. フレッツ・L. ショウ 1995 *Writing Ethnographic Fieldnotes*
= 1998 佐藤 郁哉・好井 裕明・山田 富秋(訳) 『方法としてのフィールドノート』, 新曜社。
- 労働省(編) 1999 『平成11年版 労働白書』, 日本労働研究機構。
- 桜井 厚 2002 『インタビューの社会学』, せりか書房。
- 笹田 哲夫 2001 『社会が動く家族が変わる 少子・高齢社会をどう生きる』, 桐書房。
- 鈴木 りえこ 2000 『超少子化 危機に立つ日本社会』, 集英社。
- 高橋 順一・渡辺 文夫・大淵 憲一(編) 1998 『研究法ハンドブック』,
ナカニシヤ出版。
- 橘 由子 1996 『アダルトチルドレン・マザー』, 学陽書房。
- 竹中 恵美子(編) 2001 『労働とジェンダー』, 明石書店。
- 谷岡 一郎 2003 『社会調査のウソ』, 文藝春秋。
- Tファミリー・サポート・センター 『相互援助の手引き』
Tファミリー・サポート・センター会則
- T・子育て応援団 ファミリーサポート NO. 5 2002.3
- T・子育て応援団 ファミリーサポート NO. 6 2002.10
- T県労働政策課 ファミリー・サポート・センター
- 特定非営利活動法人NPO 事業サポートセンター編 2002 『いっしょに子育て 子育て支援NPO 設立&活動ハンドブック』, 特定非営利活動法人NPO 事業サポートセンター。
- 上野 千鶴子 1994 『近代家族の成立と終焉』, 岩波書店。
- 山田 昌弘 1997 『結婚の社会学』, 丸善。
- 山田 昌弘 2000 『パラサイト・シングルの時代』, ちくま書房。
- 山田 昌弘 2001 『家族というリスク』, 勁草書房。
- 山縣文治(編) 2002 『よくわかる子ども家庭福祉』, ミネルヴァ書房。
- 山本 貴代 2001 『ノンパラ』, マガジンハウス。
- 山崎 敬一・西坂 仰(編) 1997 『語る身体・見る身体』, ハーベスト社。
- 好井 裕明・山田 富秋・西阪 仰(編) 1999 『会話分析への招待』, 世界思想社。

- 全国保育団体連絡会・保育研究所（編） 2000 『保育白書 2000年版』，
草土文化。
- 全国保育団体連絡会・保育研究所（編） 2001 『保育白書 2001年版』，
草土文化。

徳島大学総合科学部社会学研究室報告 既刊（国立国会図書館等所蔵）

- | | | |
|---|--|------------|
| 1 | エスノメソドロジーとその周辺
- 平成9年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集 - | 1998年3月発行 |
| 2 | ラジオスタジオの相互行為分析
- 平成9年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書(第二版) - | 1998年10月発行 |
| 3 | エスノメソドロジーと福祉・医療・性
- 平成10年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集 - | 1999年2月発行 |
| 4 | 障害者スポーツにおける相互行為分析
- 平成11年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書(第一版) - | 2000年2月発行 |
| 5 | 日常生活の諸相
- 平成11年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集 - | 2000年2月発行 |
| 6 | 現代社会の探究
- 平成12年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集 - | 2001年2月発行 |
| 7 | インタビューと対話の相互行為分析 気配りと配慮の社会学
平成14年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書(第一版) | 2003年2月発行 |
| 8 | インタビューと対話の相互行為分析 気配りと配慮の社会学
平成14年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書(第二版) | 2003年9月発行 |

社会学の窓 - ドラマティックな日常生活 -

(平成15年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集 -)

発行日 2004年2月23日

編集 榎田美雄

〒770-8502 徳島県徳島市南常三島町1丁目1番地

(088)656-9308 E-mail:Kashida@ias.tokushima-u.ac.jp

<http://www.ias.tokushima-u.ac.jp/social/index.html>

発行 徳島大学総合科学部社会学研究室

印刷・製本 平成15年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール
